

文学と文化の間

——ヘンリー・ジェイムズにおける言語の意味——

渡 辺 久 義

(本稿は三〇〇枚余りの未公開の論文の序論である。これだけ切り離しても批判の対象になり得る性質のものと考えるので、あえて公表することにした。)

序論 問題提起とその学的研究の可能性

(一) 問題意識の所在と「文体論」

ここに試みようとする論考は、その焦点が明確に限定されている。副題に言うとおり、それは専らヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) の小説における言語という問題を取り扱おうとする。ジェイムズの言語ないし文体がいかに興味ある問題にせよ、ジェイムズの総合的研究でないとするならば、それはむしろ一篇の研究報告で足りる問題ではないか、という疑問があるいは呈出されるかもしれない。私がこれを曲がりなりにも一つの本の形にしなければならぬ理由はいくつかある。一つには、ジェイムズという作家において、その言語(あるいは文体)という問題が、考慮の比重において大ならざるを得ないこと、純粹にその特性の記述にとどま

るとしても、優に一冊の書物になりうるということがある。現に、ジェイムズの文体を独立に論じたいくつかの研究書がある。^①アプローチのいかんにもよるが、これはたとえばヘミングウェイ（やはり文体が問題になる作家である）などについては考えられないことである。

だが、私がこれを単なる一つのモノグラフとして提供できない理由は、実はむしろほかにある。すなわち、この論考における私のささやかな野心は、究極的には、文学研究の一つのモデル——最も一般的な問題にかかわる理論と、特殊の個別的な問題を説明しようとする仮説との中間的存在としての——を提供することである。勿論、事の成否は本書の最後の頁をまつほかなく、それも著者たる私の判定することではない。だが私の狙いは究極のところ、アプローチの一つのモデルとして、一般的应用への可能性をもったジェイムズ研究であって、単なる個別作家研究としてのジェイムズ研究ではない。表題にでなく副題の方にジェイムズの名をうたったのは、今述べたような一般性への照準という含みがあつたことであるが、もっとも、この表題がふさわしいかどうか、自信があるわけではない。

なおここで、なぜ文体という語をなるべく避けて言語という語を使うかについて、一言しておかなければならない。一般に、文体という語には、いろんな情緒的連想がつきまといすぎる。しかもこれほど恣意的に用いられ従つて定義不可能な言葉もないだろう。十八世紀のフランス人、ビュフォン (Comte de Buffon) に帰せられる「文体は人なり」というアフォリズム一つをとってみても、この語の曖昧さは実感される。のみならず、この文体という概念は、言語の非本質的な面、装飾的な面を指すものと一般には受けとられがちである。そうではなく、文体こそ言われることの本質にかかわるものだという繰り返される主張にもかかわらず、である。従つて、文体という語を最初から了解ずみのものであるかのように使うことはできない。とはいえ、これを全く使わないわけ

にはいかない。いかに曖昧とはいえ、文体という概念でとらえられる言語の一つのレベルがあることは確かであるから、この語を捨て去るのは馬鹿げている。

少なくとも副題において文体といわず言語という理由は、言語の方が文体を含めたあらゆる言語の層を包括できるからである。この論考が企てるのは、まさにそういった多元的・重層的なジエイムズの言語の研究である。もっとも、あらゆる言語の層といっても、個人を全く捨棄した言語一般の問題、すなわち「言語学」の方向にむかって下りてゆくつもりはない。われわれの課題はあくまで特定の個人の言語である。特定の個人の言語とは、ソシュール言語学の言葉でいえば、ラング (Langue) に対するパロール (parole)、すなわち現実に観察可能な現象である発話にほかならない。

実はここで大変厄介な問題が生ずる。「文スタイルステイクス体論」といわれるものをめぐる問題である。「言語学」の立場から言えば、このパロールたる文体を支えるものは、当然ラングであって、「文体論」すなわち文体の学は、「言語学」の一部門である。逆にいえば、「文体論」はおのれを「言語学」の属領たらしめることによって、その科学性を主張しようとする。しかし一方において、文体（あるいは個人言語）なるものが、果して言語学的に処理しきれぬものかどうかという反省がなされる。文体は、必ずしも「言語学」と同じ規律に服することのない別の自律的な領域なのではなからうか、という可能性が示唆される。^② 文体についての学が、「言語学」の属領としての「文体論」でなければならぬ理由はなく、言語についての学が、すべて「言語学」でなければならぬ理由もないであろう。これは文学研究あるいは批評の立場からは、むしろ当然のことであって、文体が言語学的に「科学的」説明によって片附くとは思ってもよらぬことである。しかし文学研究者ないし文芸批評家は、おおむね文体を扱う「方法」を持たず、この問題を一つの学たらしめる規律を欠いている。彼らは文体を儀礼的に問題にする

ことはあっても、正面から取り上げようとはしない。従ってこの領域は、言語学者の側からも、文学研究者の側からも敬遠される曖昧な領域である。そしてこの両者の間には、冷やかな相互不信あるいは無責任な互敬の空氣が流れているというのが実情であろう。言語学者にとっての大義である「科学的」ということが、文芸批評家にはむしろペジョラティブな響きしか持たないということ自体が問題である。この両者間の橋渡しの試みの一つであったセベク編『言語のスタイル』(T. A. Sebeok (ed.), *Style in Language*, 1960) が、その意図は多とすべきも、結果は「全面的失敗」であったと評されるのは、この間の事情を物語る。^③

文学研究者にとつて、「言語学」の派生物としてしか自らを考えない「文体論」が、いかに退屈なものであるかを示す一つの例は、この方面の比較的新しい書であるターナーの『文体論』(G. W. Turner, *Stylistics*, 1973)である。この本では、文体は文法スタイルと対置され(これはやはりパロールとラングの關係に擬せられる)、スタイルリクスは、個別性を捨象した普遍的な法則を研究する文法に対して、現実の個別的な発話の特殊性を研究するものとされる。しかし文法ないし言語学との方法的な連続性という意識のみが支配するところで、いったい何が生まれるであろうか。結局それは、かくかくの情緒的・表現的特性をもった個人言語といった、やはりひとつの抽象的な記述であり、その抽象性を次第に減じてゆけば、最後には黙って引用文を指し示すよりほかないという皮肉なことになるといふことは著者自身が認めている。

われわれは文体論の基底そのものに、ひとつの不確定性原理を見出す。それはその目標——それが言語の特殊性ということならば———いかに接近しても、決して到達することがないということを保証する。われわれは規定の概括性を次第に狭めていくだろう。だがぎりぎりまで概括すると、引用する以外になすべきことは残

らなくなる。学問的批評家が詩を腐蝕させて無味乾燥な評釈の塵にしてしまうことを恐れる文学愛好家は、無用の心配をしているのである。テキストの完全な保全は、概括を重ねることによって特殊性をつかむことが不可能であるが故に、保証されている。

文体論は、従って、それがつかむことのできないものを常に指摘したり照明したりしながら、決してそれが到達できない特殊性を取り扱わねばならない。^④

世にも奇妙な論理がここには見られる。文体論はその欠点がまさに長所だという論旨である。

このようなジレンマないし袋小路からの脱出の可能性を示唆したのは、いかにそれが示唆にすぎないとはいえ、レオ・シュピッツァーの『言語学と文学史』(Leo Spitzer, *Linguistics and Literary History*, 1948)であったであろう。シュピッツァーの提唱したのは、結局、パロールたる文体を支えるものをラングの中にでなく、別のコンテクストの中に見出すことであつた。彼の主張を今直接引用によって示すのは差控えるが、それは結局、われわれの言葉に翻訳して言うならば、文学作品の表面的・可触的事実である文体は、その作品の精神、作者の精神、そしてひいてはその作者の生きた時代の精神そのものと「構造」的・有機的につながり合っている、ということである。このような文体論が直観と共感に重きをおくのは当然であり、反対者からは、「合理主義的」「客観的」でなく、彼のいわゆる「言語学と文学史の間のかげ橋」を渡そうとする試みは、あまりに強引に過ぎるという批判を蒙ったのはいたし方のないことであつた。しかし彼の示唆した方向は、言語をひとつの生命をもったものとして、その内部から捉えようとする点で画期的なものであつたとは言えるであろう。ベルクソンの生命哲学が、今日のわれわれの知的風土を考える上に、よかれ悪しかれ無視できないものとするなら、シュピッツァーの言語

の生命的把握も同様の意味において無視すべきならぬであらう。

(二) 文体に対する問題か

She had practically, he believed, conveyed the intimation, the horrid, brutal, vulgar menace, in the course of their last dreadful conversation, when, for whatever was left him of pluck or confidence — confidence in what he would fain have called a little more aggressively the strength of his position — he had judged best not to take it up. But this time there was no question of not understanding, or of pretending he didn't; the ugly, the awful words, ruthlessly formed by her lips, were like the fingers of a hand that she might have thrust into her pocket for extraction of the monstrous object that would serve best for — what shall he call it? — a gage of battle.

これは最も後期のジェイムズに属する中篇小説「寂寥のベンチ」(『The Bench of Desolation,' 1909)の冒頭である。ジェイムズの文体といえば、このような難解な後期の文章が必ず問題になる。

ジェイムズはなぜこのような文章を書いたのだろうか。「このような文章」とはどのような文章か。——それはひとまず問わないことにしよう。この文章の特徴を概念的に捉える観点はいくらでもありうる。文章の形体から(たとえば掉尾文とか)、全体的な印象から(たとえば「意識の流れ」的であるとか)、あるいは、もっと感覚的に(じれったい文章、というのも一つの捉え方である)、その他さまざまの相と概括性の程度において、この文章を捉えることができる。だがそれは今問わないこととする。問題は、なぜ、ジェイムズはこのような文章を書

いたのだろうか、ということである。ジェイムズのこの文章は、たまたま極めて強いくせを持った文章、シュビツターのいわゆる「文体的偏差」(stylistic deviation)の著しい文章である。だが私は、文体に対するこのなぜという問いを、むしろあらゆる文章に向かって発してみることを提案する。この問いは馬鹿げた問いだろうか。「なぜあなたは山に登るのか」といった問いに類する無用の問いだろうか。これを肯定する立場もあろう。文体論の任務は、与えられた表現の仕方の特性なり効果なりを記述すればよいのであって、それ以外のことには関知しないしまたすべきではない、という立場である。だがわれわれが脱却を試みているのは、まさにそのような狭隘な文体論からなのである。

文体に対するこの「なぜ」という問いは、さまざまの深さのレベルにおける問いでありうる。標準からの逸脱、つまり「文体的偏差」ということのみを文体的事実と見る考え方からは、「なぜあのリンゴだけが木から落ちないか」という問い方になるであろう。これに対して、「そもそもなぜリンゴが木から落ちるか」という問いがありうる。近代科学はそういう問いを発することから始まったのであった。この問いに対する答えにもまた、いろんなレベルがありうる。この問いに対して、「それは風が吹いたからだ」と答えることもできる。これは勿論まちがった答えではない。だがそれは事の本質にかかわる答えではないだろう。この論考ではこの次元での考察を捨象する。たとえば、ある作家の言語が力動的であるのはその作家がスポーツ好きだったせいだろうか(これは確かめようがない)、またある作家の言語に法律用語が異常に多い(これが「文体的偏差」のはなぜか、という問いに対して、それは彼が作家になる前に法律関係の仕事にたずさわっていたためだろうか(これはその伝記的事実が立証されれば、因果関係はほぼ確実だろう))、この作家のこの表現上のくせは、彼が耽読したこの本の影響によるものだとか(この仮説の判定はそのくせの種類と強さの程度如何によるだろう)、その他この種の

文体的考察、つまり「なぜ」に対して「なぜならば」とすぐに答えられるような単純な因果論的考察は、われわれの問題意識の外にあるものである。

そのような仕事には、勿論それなりの価値はある。だが、「なぜリンゴが木から落ちるか」という問いかけに對するより根本的な回答は、「風が吹いたから」ではなくて、万有引力（の仮説）である。あるいは近代科学以前の回答を試みるならば、それは万物が最終的に落ち着く所に落ち着こうとする過程における、いわゆる目的による一現象である。（この二つの説明は、全く異なった二つの宇宙觀の對等に有効な説明である。）

文体に對する「なぜ」というこの問いかけに答えることは、実は容易なことではない。この論考がかなりの紙数を費すことを見込んでおくるものは、この問いの底知れぬ深みと広がりの中へ降りてゆくことである。この問いかけは、最も深いレベルにおいては、現象学的問いかけであり得る。発話の依つて來たる根源、通常問いの對象にされない言語の基底部を問うという意味において。

ここで一つ断っておかなければならない。なぜジェイムズはあのような文章を書いたのか。この問いは生理学や臨床心理学的観点からの解答を誘うかも知れない。つまりジェイムズを患者として見ることである。たとえば、ジェイムズは性的不能の被疑者であるが、このこととあの（ヴァイタリティに欠けた？）文体はつながりがあるのではないか、といった仮説は、浅い因果關係でなく、フロイト的な深さを持った魅力ある仮説かも知れない。だがこれはわれわれには全く無縁の問題である。かりに（これはありそうもないことであるが）、多くの臨床調査によって、実はあれは性的不能者特有の文体だったのだ、という立証がなされたとしても、やはりわれわれには無關係である。それはそれなりに一つの成果であって面白いには違いないが、その事実が文体論や文芸批評に代ることはできない。

(三) 何を「読む」か——言い方の意味するもの

文学の研究においてテキストを読むことが基本であることは言うまでもない。だが「読む」とはどういうことか。何を読むのか。まず普通、最初にわれわれが読み取ろうとするものは、伝達されようとしている意味内容であろう。これは文学作品であろうとそうでない普通の文書であろうと変りはない。ただ後者の場合は普通、意味内容が頭に入りさえすれば、あとは用済みのものでしてテキストは捨てられる。前者の場合でも、あるもの（特に小説のそれ）は後者の扱いを受けてよい場合もあるし、またその扱いを受けてならないものが、不当にその扱いを受けることもある。（ただし、これは価値論になるから今は慎重にこれを避けたい。ここでは価値論抜きでものを言っている。）この一見単純な意味内容を読み取るという作業でも、なかなかそのからくりは複雑なのであって、ロラン・バルト (Roland Barthes) が『S/Z』で示したように、そこには作者と読者の間の共通の「文化的コード」がなければ成り立たないだろう。ただ、今はこれについては立入らないことにする。

文学作品の場合、通常われわれは伝達された言葉の意味だけを考察や鑑賞の対象にするのではない。もしそうであれば、詩の研究が翻訳でできることにもなる。散文の場合でも本当は同じはずだが、詩の場合が一番はつきりしている。詩を読むということは、日常的な意味での意味内容だけを読み取ることではない。それはいわば、その詩作品から発信されてくるかすかな電波に微妙に自らを調整して受信することだ、と言ったのはC・デイ・ルイスである。詩は一種の身体言語^{ボディ・ラングエッジ}であって、読む方もこれを身体で受けとめなくてはならない。これが詩を読む、ということである。だから詩を読むとは詩を体験することだと言わなくてはならない。このことは散文文学の場合でも本来は同じであるべきだろう。

今述べたことは、文学作品の鑑賞という観点からである。ところで今詩の読み方について述べたようなことが、文学・非文学を問わず、あらゆる言語表現に対してなされ得るのではなからうか。勿論、文学作品でないものを鑑賞するというのは馬鹿げている。問題はそうではなくて、ちょうど詩を読むときにそうするように、あらゆる言語表現の中に、読み取れるものの幾つかの層が見分けられないか、ということである。

たとえば、「行間を読む」という言い方がある。日常生活においても、同じことを言うのに、何となく怒気を含んだ言い方と、どことなくやさしい言い方というのがある、われわれはこれを読み取っている。「相手の気持を読む」とわれわれは言う。この他「手の内を読む」、「顔色を読む」、「先を読む」等々の表現がある。これらはいずれも、表面に直接あらわれたものでなく、その下に隠れたものを見抜くことである。これらは勿論、「読む」という動詞がたまたま多様に使われるのを利用した比喻に過ぎないが、言語の場合も、言われていることの意味、伝達内容の意味のほかに、言い方の意味するものがある。

言い方の意味するものを読み取ること——これがわれわれに課せられた仕事である。しかし与えられた文章の中に何が読み取れるだろうか。あるいは何が聞き取れるだろうか。心を虚しくして耳を傾ければ何か聞こえてくる、などというのは、詩の鑑賞法としてよく聞かされることではあっても、おおよそ言語を学の対象にしようとする者の言うべきことではないかも知れない。しかし出発点はやはりそこにあるというべきだろう。文体の手ざわり、調子、息づかいといった感覚的なもの、及びそういったものを全体性の中に位置づける直観の役割を無視することはできないのであって、そのようなものの権利を認めることからわれわれは出発しなければならぬ。

今述べていることは、文学・非文学を問わずあらゆる言語表現についてである。ただ文学作品の場合はそうでない場合に比べて、問題を更に複雑にする要因が上乘せされていることは明らかである。文学における言語は言

うまでもなく、すべてある効果を狙った言語である。文学の言語は、I・A・リチャーズ(I. A. Richards)に従って言えば、「指示」の言語でなく「喚情的」言語である。文学作品の場合、だから、聞き取れるものの層が更に厚みを増すことは明らかである。われわれの試みようとするヘンリー・ジェイムズの言語分析にかなりの紙数がかかるのは、その要因が大きいからである。しかし、情緒の喚起を狙ったのでない「指示」の言語の場合にも、そこに聞き取れるものがないだろうか。言い方の意味するものが読み取れないだろうか。その発話を支え、それを可能ならしめる文化構造のようなもの、書いている人間の根本的な位相のようなものを読み取ることは不可能であろうか。これは読み取るといっても、鑑賞や感情移入とは全く違う次元における読み取りである。文体に対する現象学的問いかけと先に言ったのは、そのような意味においてである。

(四) 構造の概念とその効用

ロラン・バルトは『零度のエクリチュール』(Le degré zéro de l'écriture, 1953)の序文を次のように始めている。

エベールは「ペール・デュシェーナ」紙の記事をいつもきままって、「くそ」とか「ちくしょう」といった類のコトバではじめたものだった。これらの粗野な口調は別に何も意味しはしなかったが、さし示してはいた。何をか？ ある革命的なシチュエーションの全体をである。だからこれはもはや単に伝達したり、表現したりするだけではなくて、言語のかなたのものを強いるのが機能であるエクリチュールの見本といつてよいし、言語のかなたのものは、歴史であると同時にそこにおける主体の決意なのである。^⑥

バルトがここで注目しようとしているのは、言語の signifier の機能でなく、signaler の機能、つまり言い方

の意味するものである。しかしそれは記述文体論や文学鑑賞の次元でのそれではない。もしそうであれば、エペール (Jacques Hébert フランス革命時の政治家・ジャーナリスト) の文章は、単に「粗野な怒気を含んだ文体」といった概念的特徴をつけられて片付けられるであろう。だがバルトが問題にするのは、そのような文体の特徴のさし示すものである。ここで問題にされているのは、発話する主体の位相、書くという行為の歴史へのかかわりである。つまり、エペールのこういう文章表現によって相対的に浮かび上ってくるのは、その中にどっぷりと漬かって自らそれに気付くことのなかった反革命的意識構造の全体である。(エペールのこの文体はいわば、文人人類学者のいわゆる「道化」^{ドクタースネ}の役目を果していると言ってもよいだろう。) バルトがこのような文体的特徴の中に読み取るのは、相対化された二つの全く異なった意識構造の間の断層である。

そこでわれわれは次のようなことを仮説的に問うてみることにしよう。すなわち、あらゆる言語的発話において、それを支える文化構造ないし無意識の精神構造を、それ自らに語らせることが可能ではなからうか。発話の内容よりもむしろ発話のかたち、がそれを物語りはしないだろうか。わが国に面白い言い方がある。いわく「問うに落ちずして、語るに落ちる」と。われわれのもくろむ文体論は、いわば語らしめて落とすのである。あらゆる言語表現は必ず何らかの点でその「馬脚」をあらわしていると考えることができる。それは発話する当人が深くそこに根ざしていながら、全くそれと気付くことのない精神構造ないし文化構造が、何らかの形を通じて自らを露呈するからだ。その顕著な例は、最近よく問題になる差別用語の問題である。糾弾されるのは、発せられた差別用語そのものよりも、それが発せられることによって露呈された差別的体質、すなわち無意識の差別的文化構造であろう。努めて差別用語を使わないようにするということは、従って全く問題にならないのである。

つまりそれはこういうことだ。差別糾弾者が発話の中に混入した差別用語を通じて、またロラン・バルトがエ

ベールの文体的特徴（「粗野な口調」）を通じて読み取るものは、等しく、それを支えその母胎となっている「構造」なのである。これを逆に言えば、「構造」がそのような表面にあらわれた文体的特徴を通じてものを言うのである。われわれの試みようとする文体論の目指すところは、結局のところ、この文体的特徴を通じての「構造」の読み取りということである。われわれは文体を、微視の世界と、巨視の世界の融合する、融合点として、捉えることが可能だと信ずる。

ところで、何も語らない文体というものがあるだろうか。何の特徴もなく、従って何もさし示さない文体というものがあるだろうか。白紙のようにニュートラルな発話というものがあり得るだろうか。われわれは仮説的にそういうものはあり得ないと信ずる。そのことを示すよい例は、いわゆる「リアリズム」の文体である。「リアリズム」はおのれの現実把握が全く客観的・不偏不党であると主張する。しかし今日われわれは、それが現実把握の一つの形態に過ぎないことを知っている。つまりそれは相対的なものとして「構造化」されているのである。「リアリズム」のあの冷静な科学者ぶった語り口は、われわれにとっては、その母胎たる特定の意識構造をさし示す明瞭な指標である。その意識構造とはいかなるものか。それは一口で言うならば、現実が言葉や元素に還元し得るといふ、一時代・一文化圏を覆った強力な信念、だがわれわれにとっては括弧に入れられた精神構造である。

「構造」という考え方は、今日の批評的・学問的風土の中では、避けようとしても避けられないものになったと私には思える。「構造主義」そのものについて語ることは難かしいし、その能力も私にはない。しかし、当面われわれにとって価値のあるのは、それが直接表層にあらわれた事実の、浅い説明でなく、深い説明を与えてくれるということである。エペールの毒づくような文体を、彼のその時の機嫌の良し悪しや性格によって説明する

のも一つの説明たり得るが、われわれを満足さす説明ではない。それはエペールという人間と歴史とを同時に見失った説明である。人間と歴史が文体の中に融合しているからである。また、差別用語の混入した発話について、その発話者が思いやりに欠ける人間なのだという表面的因果の次元にとどまるならば、それは人品改良の問題であって、差別的文化構造そのものは問題の地平に上ってこないことになる。表層にある事実が本当の意味で「説明」されるのは、それがその根ざす非人称的で無意識的な深層構造に、(仮説的に)結びつけられたときである。

発話のレベルにおける文体的特徴に何を語らせるか。それが何の徴候たり得るか。ウォールター・カウフマン (Walter Kaufmann) はその著『宗教及び哲学批判』(Critique of Religion and Philosophy, 1958) の中で、「徴候の意味」(symptomatic meaning) というものがあると言っている。^⑦これは書物(特に哲学書)の深い読み方を教える本であるが、著者は哲学書の中で述べられる命題をそれだけ切り離して解釈することの危険を指摘する。それはその書物の全体的な論理展開のコンテキストの中で解釈されねばならない。それがこの命題の「体系的意味」(systematic meaning) である。しかしそれでもまだ十分とは言えない。一つの命題はその哲学者の著作活動の発展の中でとらえられなければならない。これが「発展的意味」(developmental meaning) である。しかしこれでもまだその命題の意味を完全に把握したとはいえない。もっと大きなコンテキスト、つまりその哲学者の生きていた時代の時代精神、もっと正確に言えば、彼の生きている時間的・空間的文化圏の精神構造があるはずである。彼の言葉はそういった大きな全体的な「場」の中で方向づけられているはずである。つまり、彼の言葉はその「場」の存在の徴候としての意味をもっている。カウフマンの言う「徴候的意味」とはこれである。この次元での意味とは、言われていることの内容よりも、むしろ言い方の意味だろう。使われる用語や表現法自体が一つの「徴候」である。われわれがヘンリー・ジェイムズの言語の中に探ろうとするもの一つは、そのような「徴候

の意味」である。しかしそれは同時に、「体系的意味」、「発展的意味」を探ることを必然的に要求する。

(五) 有機体としてのジェイムズの言語——概観的序説(1)

非文学の言語はしばらく措くとして、文学の言語を有機体として捉えようという提案が一般にどんな風に受けとられるか、予測が困難である。当然すぎて言うまでもないことなのか、それとも反対に、言語の学として自殺行為と言われるか、全くわからないのである。後者の立場からは、言語の科学の場に怪しげな生命主義、あるいは言霊信仰めいたものを持ち込むのは百害あって一利なく、おまけに「murder to dissect」などということを経科玉条として分析そのものを軽蔑するようでは全く話にならない、といった受けとり方をされるかも知れない。しかし言語を有機体とみることが非科学的だとは限らない。逆に、真に科学的に言語を扱おうとするならば、これを有機体として捉えることが絶対に必要だという考え方も可能である。一篇の詩を構成する一つ一つの言葉が、その詩の全体的生命の「場」の中で生かされ、逆にその詩に生命を与えているのは、ちょうど生命体とその細胞の関係と同じではないか。細胞と同じく詩の言葉も有機体と考えることなしに、どうしてその研究の科学性が保証されようか。

いずれの言い分が正しいか、これだけでは判定できない。それは研究と論証の説得力の問題であって、立場の問題ではないからだ。いずれにせよ、私がジェイムズの言語というものを思いえがくとき、それは何であるよりもまず一つの大きな有機体として立ち現れる。有機体として捉えるまでもなく、有機体であるように思われる。

ところで文学作品の言語を有機体として捉えるというのは新しい考えでなく、前に触れたように、レオ・シュピッツァーの示唆したのもその方向であった。彼は次のように言っている。

かくして、ラブレの言語の研究によって明らかにされたことは、その文学的研究がこれを補強するであろう。それ以外にあり得ない。なぜなら言語は「内なる形式」の外にあらわれた結晶作用の一つに過ぎないからだ。あるいは別の比喩を用いるならば、詩的創造物には、われわれがその有機体の「言語」「思想」「筋」^{プロット}「構成」^{コンストラクション}等のどこを切ろうとも、同じ生命の血が流れているのだ。^⑧

勿論、シュピッツァーの見解はわれわれにとって一つの参考見解である。われわれはこれに依拠して研究を進めるわけではない。

ジェイムズの言語が一つの巨大な有機体に見えるのは、そこにさまざまな要因が絡みあっているからだと考えられる。その要因の一つ一つを解きほぐしてゆくのがわれわれの仕事である。ジェイムズの文学において言語というものの占める役割が、恐らく他のいかなる作家の場合よりも大きいであろうことには、ほとんど異論はないだろう。なぜ言語という面が特に大きくクローズアップされねばならないか。それは言うまでもなく、「円熟期」といわれる後期のあの特異な文体のためである。シュピッツァーは「言語」「思想」「筋」「構成」のどの入り口から入っても同じ所に行きつくはずだ、という仮説を立てる。これをジェイムズの後期の小説に当てはめてみるとどうだろうか。「言語」「思想」「構成」は入り口からして別々だとは思えない。この三つは始めから不可分の一つのものである（「筋」はさておくとして）。これを論証するのが本書の課題の一つになるわけだが、ともかくもこれがジェイムズの言語の有機性の一要因である。

更にジェイムズの言語を有機体たらしめる要因は、彼が決して始めからあのような文章を書いたわけではなくて、あの文体は初期から後期へかけて微妙に、しかし大きく変っていった最終的完成的な形体だということであ

る。これは単なる気まぐれや偶然によってそうなったのだろうか。単なる趣味の変化として片付く問題だろうか。そうではなくて、文体が自らを内部から律する一つの原理のようなものがあつたとみるのが妥当であろう。これも本書の論点の一つになるであろう。

彼の文体がそういうふうなものであると言うことは、彼が言語芸術家だと言うことである。小説家がみな言語芸術家であるわけではない。むしろそれはまれなことであろう。たくみに言語をあやつる者という意味でなら、たいていの小説家は言語芸術家だろう。私のいう意味は、いわば本能的に言語を芸術表現の媒体にする者、とも言うべきだろうか。それは必ずしも、すぐれた言語の使い手ということを意味しない。フローベールは疑いなく、ジェイムズと並ぶ言語芸術家であるが、フローベールの場合はその意味合いがだいぶ違っている。彼の小説を支えるのは忍耐という原理であつて、ジェイムズのような自然に成長した植物のような言語とは対照的である。これもまた論点の一つとなるであろう。

ジェイムズが言語芸術家だというときまた私は、彼が小説家としてすぐれているという予断のうえで言っているのではない。小説家は「芸術家」などでない方がよほどすぐれた小説が書けるのだ、といった議論は枚挙にいとまがなく、またしばしばそういった論者の言うことは正しいと思われる。ただ、ジェイムズを引き合いに出してそれが言われるとき、おそらく論者の頭にある意識的な芸術家としてのジェイムズの像は、おおむねまちがっている。私は思う。ジェイムズはそんな意識的な理論武装した芸術家ではないのである。理論や形式が先に立つたために彼の小説が駄目になったのではない。その点について言うなら、彼の小説は始めから駄目だったのである。彼が小説家として大きな欠陥を持っていたこと、これは認められなければならない。どのような欠陥であるか、またそれが彼の言語とどのようにかかわるのか、これも論点の一つである。

彼の文体が有機体だというのは、そのような欠点にもかかわらず、文章がすぐれているためでもなければ、そのような欠点をよそにして、文体的成長を遂げたためでもない。そのような欠点を深く捲き込みながら自己調整をするように成長していったからである。従って後期の文体の秘密は初期の文体との比較検討なしには解き明かすことができない。

(六) 時代と文化的土壌——概観的序説(2)

繰り返して言うなら、ジェイムズの言語が有機体の相を帯びて見えるのは、それが外部からの理論や主義などによってでなく、試行錯誤はあったにせよ、結局全体としてみれば、使い手たるジェイムズの芸術的本能の選択するところに従って自律的に動いていくからであり、更にその最終形体において、言語の形が作品の形であるような、つまり言語が作品そのものと有機的に不可分であるような状態を作り出したからである。(このことの論証が本書の第一章をなすはずである。)

しかしわれわれがジェイムズの言語を有機体と呼ぶ理由はそれだけにとどまらない。ジェイムズの言語は、更に巨視的に見るならば、より大きな全体、つまり彼の置かれていた時間的・空間的「場」の函数である。つまりジェイムズの言語は、彼の生きていた時代的情況とその根ざしていた土壌によって方向づけられたものとして理解することができる。時代的情況とは具体的には、世紀の変わり目(「世紀末」という言葉はデカダンスの連想があるから避けたい)を中心として考えられる西欧全般における精神的風土であり、根ざしていた土壌とはアメリカ文学という土壌である。「土壌」といい「風土」といい、時間軸を捨象した表現であって、私の観点が「構造」的なものであることは推察されうるであろう。)

十九世紀後半から二十世紀始めにかけて、西欧思想の各分野、すなわち芸術、文学、科学、哲学等に共通の一定の型をもつ思考様式の革命があり、アメリカ文学にはある一定の体質、すなわちその見かけの多様性にもかかわらず、一定の共通因数を認めることができる。ジェイムズ小説における言語は、そういったものを指し示す「徴候」を持っている。つまりわれわれはジェイムズの言語の中に、そういったより大きな文化的「構造」を読み取ることができる。前に述べたように、文体は微視的なものと巨視的なものが融合する融合点である。レオ・シュピツァーが文体と「文学史」とを結びつけようとしたとき目指していたのは、今述べたような構造的・函数的なつながりではなかったろうか。（彼の著書の題が「言語学と文学史」であることを想起されたい。）

ジェイムズが言語芸術家だというのは、彼がそういったより大きな全体すなわち文化的風土と、何よりもまず言語を通して、いわば本能的にかかわろうとするからである。イエイツについて論じながら、芸術家は自己に忠実であることによって彼の生まれた国と世界を表現する、と言ったのはT・S・エリオットであった。ジェイムズが文体によって手探りしながら進んでいったその方向を決めたのは、芸術家の本能的な審美的選択であったと言えるであろう。しかし彼は同時に、無意識あるいは半無意識のところ、おのれを超えたより大きな全体を表現しようとしていた。芸術はその根を持たないでは生きることができないことを彼は知っていた。ジェイムズの言語は、おのれの根ざすべき、そしておのれを生かすべき全体性を常にさし示している。

以上のような考察が、第二章及び第三章をなすはずである。

この研究はヘンリー・ジェイムズの言語を考察する一種の文体論であるが、以上に述べたような方法論的素描から推して、ひとはむしろこれを文体生理学とも文体文化関連論とも呼ぶかもしれない。呼び方は何であっても

いい。われわれの目指すのは要するに、生き物としての言語の研究である。結局それは言語の言語内の事実にとどまることはできない。それを支えるあらゆる個人的・文化的背景を考慮しなければならない。少なくとも個人言語の研究に関する限り、それ以外に方法があるとは思えないのである。また始めに述べたように、この研究の意図は、究極のところ、アプローチのひとつのモデル、つまり文学における文体というものの考え方のひとつのフレームワークを提供することである。もしこれが結果において、単なる作家の特殊性の研究にしかならないとしたら、この研究の意図は、従って半分しか実現されなかったことになる。

〔注〕

① e.g. Seymour Chatman, *The Later Style of Henry James* (1972); W. Veeder, *Henry James: The Lessons of the Master: Popular Fiction and Personal Style in the Nineteenth Century* (1975); R. B. Yenzell, *Language and Knowledge in the Late Novels of Henry James* (1976); R. L. Gale, *The Caught Image: Figurative Language in the Fiction of Henry James* (1964).

② Seymour Chatman (ed.), *Literary Style, A Symposium* (Oxford University Press, 1971) に収められた論文の多くがそのような立場を表明していることは注目されてよい。

③ David Lodge, *Language of Fiction* (Routledge & Kegan Paul, 1966), p. 57, footnote.

④ G. W. Turner, *Stylistics* (Penguin Books, 1973), p. 13.

⑤ ビニール・ギロー『文体論』（佐藤信夫訳、白水社）に、シムピソンの方法を簡条書にまとめてあるので紹介しておく。

- 1 批評は作品に内在するものである。
- 2 作品はすべてひとつの全体である。
- 3 どんな細部でも、われわれはそれをたよりにして作品の中心へはいり込むことができるはずである。
- 4 ひとつは直観によって作品のなかへはいり込む。
- 5 こうして再構成された作品は、ひとつの総体に組み入れられる。
- 6 このような研究が文体論であり、それは言語上の特色を出発点とする。
- 7 特性的な特色とは、個人的な文体的偏差である。

8 文体論は共感の批評でなければならない。

⑥ ロラン・バルト『零度のヒククリチュール』（渡辺・沢村訳、みすず書房）5頁。

⑦ Walter Kaufmann, *Critique of Religion and Philosophy* (Harper Torchbooks, 1958), p. 72.

⑧ Leo Spitzer, *Linguistics and Literary History* (Princeton University Press, 1948), p. 18.